

## 徐福と修験道

伊藤健二

### 1. はじめに

全国にある徐福伝説は、どのようにして成立したのだろうか。「実際に徐福が来たから伝説が発生した」との考えもあるが、歴史的、考古学的に徐福が来たという根拠は確認できず、やはり伝説として発生したと考えるのが自然である。日本徐福協会も、「徐福伝説」を世界無形文化遺産とする方向であり、そのためにも、徐福伝説発生<sup>の</sup>解明が求められる。

では、徐福伝説の発生要因はなにか？

愛知大学の民俗学の先生である遠志保氏著の『徐福伝説考』では、「新宮市誌」の記述や、新宮市立歴史民俗資料館長の奥野利雄氏の話から、熊野の徐福伝説は次の四つの要素が長い年月のあいだに反応しあってできたものだと記されている。

- ① 有名な史記についての記述
- ② 熊野付近に、中国の船が何度も流れ着いた記憶
- ③ 修験道などが盛んな紀伊半島の宗教的な風土
- ④ 中国を崇拝する気持ち

この中で、③の修験道が最も重要な点だとしている。

修験道の中心地の一つは、熊野であり、ここには古くから徐福伝説がある。また全国各地の徐福伝説地の多くも修験道と深い関わりのある地域だ。そのため熊野の修験者が各地に徐福伝説を伝えたのではないかと、との考えもある。しかし熊野の修験僧が、各地を回って徐福伝説を伝えた、と仮定するといろいろ矛盾が生じる。徐福伝説のある地方の寺社は、修験道系であるけれど英彦山、羽黒山などの大規模な寺院でなく、中小規模の修験道寺院や村の鎮守がほとんどであり、そもそも熊野三山の縁起書などには徐福は登場しない。

二年前、私は山北町で開催された山岳修験道学会に出席し、修験道研究の第一人者の宮家準先生と話をする機会があった。そして教えていただいたことは、そもそも熊野三山の修験僧は、全国に布教に回ることはなかった。また熊野のテキスト（原典）にも徐福は登場しない。徐福伝説は熊野の修験者が伝えたのではなく、各地から熊野に来た人たちが伝えたのだろうということだ。そうだとするとこの矛盾は解決する。

この論文では、徐福の神仙思想と修験道の基本的な事項を整理し、各地、特に富士山の修験道と徐福伝説の関わり、最後に熊野修験と徐福伝説の関係を考察したい。

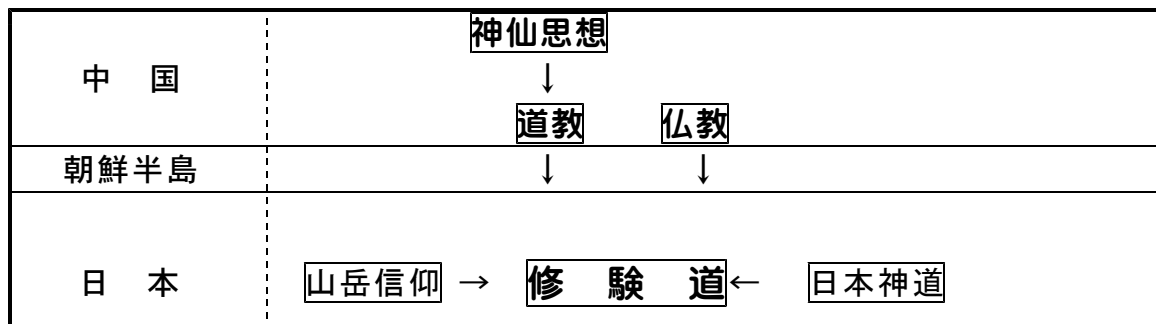
### 2. 神仙思想と修験道

徐福は「方士」であるが、方士の技とは、神仙・医薬・保健・摂生である。「神仙」は神の山を崇めることにより、不老長寿をめざす。神の山は、泰山であったが、その後東方の海中にある蓬莱、方丈、瀛州ということになった。この神仙思想は、後に成立した道教の基本的な思想となって受け継がれていく。（池上正治氏著『徐福』による）

道教の日本への伝達は、577年に百濟国王が日本の天皇に、道教の流れである呪禁師<sup>じゅこんし</sup>を送っ

たのが始まりとされている。現在でも日本では、民間や天皇家で数多くの道教に由来する行事が行われている。「天皇」という詞も、元来道教の神様の名前から来ている、と言う。

道教は、日本では独立した宗教として成立しなかったが、日本独自の宗教である「修験道」は、道教が持っている神仙思想を色濃くうけつぎ、これと仏教、日本古来の山岳信仰、日本神道が習合して成立した。修験道は、山に籠もって修行し、悟りを得るという宗教であり、修験道の中心地の一つに、熊野地方がある。熊野地方の中心は、和歌山県新宮であるが、ここには濃厚な徐福伝説がある。



### 3 修験道の歴史と徐福伝説

一口に「修験道」といっても、時代によっても形態は異なり、複雑な経過をたどってきた。ここでは、一般的に言われている修験道の簡単な歴史、特に徐福伝説の多くが成立した江戸時代の状況について見ておく。

修験道は飛鳥時代に役小角（えんのおづぬ）（役行者）が創始したとされる。役小角は8世紀末の『続日本紀』に7世紀末の人物とされているが、史実はよくわかっていない。修験道の成立は平安時代以降に日本の土着の神々と仏教が習合した神仏習合の宗教として盛んとなり、さらに密教（天台宗・真言宗）との関わりが深くなったとされている。

中世、熊野三山と聖護院門跡（門跡とは、宗門の本山。又はその僧。）と結びつき、「本山派」が形成され、また吉野大峰修験が京都醍醐寺三宝院と結びついた「当山派」の大きく二つの流れとなった。

この時代、地方の実力者（檀那）が熊野に寄進し、また熊野詣でを行う際に道案内宿泊等の世話をする先達の制度ができ、これを修験者が勤めた。

江戸時代になると、幕府は修験道を本山派、当山派のいずれかの派に属すように命じたが、羽黒山、英彦山は、「別山」として独立を保った。

修験者は、山伏とも言い、山にこもって修行する、というのが常識的なイメージであるが、江戸時代になると、山伏の形態が変化し「里山伏（里修験）」が主流となる。

里修験とは：  
じゅじゅつ  
 村人へ祈祷や呪術 宗教的活動をおこないながら、村の一員として村人とともに生活している修験者のことを指す研究上の用語・概念である。  
 修験者なのだが、山岳修行を重んじない。山岳修行をあまりしないのにどうして修験者なのかと言えば、実際に中央の修験教団や地方修験霊山の支配を受けていたこと、また、本来山岳修行・遊行を旨とする修験者の世俗化し定住化した姿であるとみなされていることによ

る。そうした支配状況（表面的な一局面）、定着化の理論（実証されているわけではない）のフィルターをはずして眺めるならば、村人とともに暮らし、村人に最も身近な、様々な活動をおこなう民間宗教者と言える。

『修験道入門』（岩田書院）中の「第10章 里修験の活動と組織」久保康顕著）より

修験道と徐福伝説の関係を考える場合、修験者そのものだけでなく、修験者を取り巻く歴史的背景、特に多くの徐福伝説が江戸時代に成立したことを考えると、江戸時代の宗教状況を見ていく必要がある。

なお、江戸時代に成立した徐福伝説については、『アジア遊学 東アジアにおける旅の表象』（2015年4月）の「江戸時代における徐福伝説の文献分析」（呉偉明著）に詳しく研究されている）

### 参考. 修験者と薬草

修験者が祈祷や霊力で病気を治す、などというのと、インチキ宗教ということになるが、修験者は祈祷だけでなく、薬草を調合し、不老長寿を求める医者でもあった。

江戸時代の修験者と薬草との関わりは、修験者が活躍した福岡県の求菩提（くぼて）資料館のホームページで紹介されている。

#### 修験と薬 （求菩提資料館 HP より）

近世の山伏は民間祈祷師であるばかりでなく、人々にとっては頼りになる民間療法の専門家でもありました。つまり、病気を治すための加持祈祷を行うかたわら、薬草・薬石をそえることを忘れなかったのです。山伏たちは、本草学に関する知識を持ち、山中で薬草を採取あるいは栽培して、さまざまな薬をつくりました。つくった薬は年に一度の檀家廻の際に配って歩き、翌年檀家を訪ねた折に、もしもその薬が吞まれていると、代金を頂くといい具合でした。「入れ薬」のはじまりです。



薬袋とその版木

徐福は「方士」であり、「方士」とは、神仙・医薬・保健・撰生の技を持つことは前述したが、修験者もまた同じである。このようなことから、修験者のあいだから徐福伝説が生じることは十分に考えられる。

なお、富山の薬売りの源流も、立山修験との指摘がある。（『情報システム学会誌 V12No2』魚田勝臣）

## 4. 富士山の修験道と徐福伝説

前述したように、富士山は山全体が修験の聖地であるが、富士吉田を中心とする北富士と、

富士宮を中心とする南富士は様子が大きく異なる。南富士は熊野系修験（本山派）の聖地であるが、ここには徐福伝説は存在しない。富士吉田を中心とした富士北麓は、御師による富士講の地である。講とは民俗宗教における宗教行事を行なう結社のことで、富士講は、江戸時代中期に江戸を中心に普及、発達した民衆信仰である。富士講の人々を宿坊に止めたり、神事を行うのが御師で、御師はほとんどが町人であったが、名字帯刀が許された。

なお富士講は、修験道の行者である長谷川角行（安土桃山～江戸時代初期）が始めたとき、現在も富士吉田には、御師の家が残る。富士吉田には「徐福が鶴になった」という伝説が残るが、これを通して、徐福と修験道、道教との関係を考察したい。

（「鶴塚碑」の訓読抄録）

**鶴塚碑**

峡州に鶴郡あり。その地、富士の趾に接す。相伝う、孝靈天皇の時、秦の徐福、伴を結びて此に至り、福壤なりとし、遂に留まりて去らず。後に鶴三隻ありてこれに居る。時人、福等の化する所なりとおもえり。

---

富士山麓の徐福伝説は、徐福等が老いて鶴に変身したというユニークなもの。福源寺の「鶴塚」は、そのうちの一羽が命を落とした元禄11年（一六九八）に築かれた。寛政10年（一七九八）、漢詩人として著名な六如慈周により、由来を述べた「鶴塚碑」が撰文された。

### (1) 鶴伝説と修験道

富士吉田には、江戸時代中期に建立されたと推定される徐福の墓などがあるが、文献的にはっきりしているのが、徐福が鶴になって死んだという伝説で、元禄11年福源寺境内に鶴塚が建立された。

なぜ徐福と鶴が結びつくのか？

鶴は、中国では仙鶴とされ、道教では鳳凰に次ぐ貴い鳥とされている。富士山は修験道の聖地であり、修験道は道教の思想も取り入れられている。この為神仙の徐福と鶴が結びつけられたと思われる。

以前の中国人民元のお札には、10元札には鳳凰、5元札には仙鶴が描かれている。また、道教の道士の法衣にも鶴が描かれている。このことから仙鶴の文化的重要性が感じられる。

なお、鶴伝説は江戸時代の生類憐みの令の時代に成立しているのではなか、との地元研究者の意見もある。伝説の生成には複数の要素が絡み合うことも多いことから、これも考えられる。



中国5元札には仙鶴



中国10元札には鳳凰



道教の法衣



法衣には鶴が描かれている



## (2) かぐや姫伝説と修験道

富士山関係の神々は、江戸時代まで、本地（本来の仏、本地に対し垂迹とは、仏や菩薩が日本の神の姿をとって現れること）は修験道の神である大日如来、浅間大菩薩は、かぐや姫（赫夜姫）であった。

竹取物語の成立は9世紀末から10世紀初めと推測されているが、最も古い写本は室町時代末である。その後中世から様々な変容し、かぐや姫が富士浅間神社の菩薩であるとの記述が南北朝時代の文献に確認できる。各所で書かれた富士山縁起などに、かぐや姫が月ではなく富士山に帰って浅間大菩薩になったことなどが記載されている。ここではかぐや姫は仙女であり、修験道の神仙思想が色濃く反映するものだ。徐福伝説は富士山北麓にしかないが、かぐや姫伝説は富士山全体にある。また徐福は浅間神社の祭神とはなっていないが、かぐや姫は広く浅間大菩薩として祭神となっている。このあたりも、徐福が修験道の中枢にはないことの現れと言える。



なお、現在は富士山の女神は木花佐久夜毘売（コノハナサクヤヒメ）であり、かぐや姫は見られない。江戸時代の朱子学者であり、徳川幕府の政治顧問でもある林羅山の思想は神儒一致であり、仏教や修験道の排斥であった。林羅山は『丙辰紀行』で、「伊豆の三嶋大社の祭神は大山祇であり、三嶋と富士は親子関係であるので、富士山の祭神はコノハナサクヤヒメだ。」とした。林羅山以前に、祭神がコノハナサクヤヒメとする文献が存在しないことから、祭神の変化は、林羅山の力によるものとされている。江戸時代を通じて祭神が徐々にコノハナサクヤヒメに替えられ、最後に残った修験道色の濃い村山浅間神社も替えられてしまった。

江戸時代中期から、神社の神々は日本本来の神々に戻すべきだという国学がわき起こり、明治時代になると、富士周辺では激しい廃仏毀釈があり、寺は破壊され、仏像は噴火口や沢に投げ込まれた。また大日如来などの修験道の祭神が古事記日本書紀の神々に替わり、富士山の地名も釈迦岳が志良山岳、文殊岳が三島岳、観音岳が伊豆岳、大日堂は浅間宮に変えさせられた。

（参考文献：『富士山の祭神論』竹谷靱負著 2006年9月岩田書院。富士宮市歴史講座『村山修験と富士講』沢田政彦著）

「富士山大縁起」(元禄10年)に書かれたかぐや姫物語

# あらすじ



駿河の国、乗馬の里に住む「作竹の翁」と呼ばれるおじいさんは、竹の中から小さな女の子の赤ちゃんを見つけました。おじいさんは赤ちゃんを家に連れて帰り、おばあさんと二人で大切に育てました。

赤ちゃんはすくすくと育ち、国中に並ぶものがないほど美しい娘になりました。娘は、いつもかぐわしい良い香りがしていて、体からは神々しい光を放っていました。その光で辺りは夜でも昼間のように輝いていたので、かぐや姫(赫夜姫)と呼ばれるようになりました。

かぐや姫が16才になった頃、一人の役人がおじいさんの家に宿をとりました。すると、夜になっても火を燃やしているように明るかったので、役人がおじいさんに理由をたずねました。おじいさんは、かぐや姫が放っている光であることを伝え、かぐや姫を役人に会わせました。

役人は、かぐや姫の美しい姿に驚いて、帝の后にふさわしいと伝え、帝に報告するため都へ帰っていきました。



しかし、かぐや姫は、富士山のほら穴に帰るため后にはなれないと、おじいさんとおばあさんに伝え、自分に会いたくなったら富士山のほら穴にきてくださいと言いました。

この噂は国中に広がり、かぐや姫が帰る日になると多くの人が集まって、皆別れを惜しんで涙を流しました。その場所は憂涙川(現在の潤井川)と呼ばれました。この時代、富士山は、神仏の住む世界で登るのは恐れ多いと考えられていましたが、皆かぐや姫を追って富士山に登りました。すると、途中でかぐや姫は振り返って別れを告げ、おじいさんと最後の別れの歌を詠んで、一人山頂へ登っていきました。この場所を中宮と呼んでいます。

かぐや姫は富士山頂に着くと、山頂にある釈迦ヶ嶽の近くの大きな岩にあるほら穴に入っていました。実は、かぐや姫は富士山の神さまだったのです。そして、人々を救うために『浅間大菩薩』という女性の神さまの姿になって乗馬の里にあらわれたのです。

それからは、人々はかぐや姫にみちびかれ、女性は富士山の中宮まで、男性は山頂まで登れるようになったということです。



かぐや姫を后にと望んだ帝は、駿河の国へやってくると、おじいさんを案内に富士山へ登りました。途中、帝が冠を脱いで休憩した場所は、今では冠石と呼ばれる石となっています。

そして、帝は山頂でかぐや姫に会うことができ、二人で富士山のほら穴の中へ入っていきました。

ところで、実は、かぐや姫を育てたおじいさんは『愛鷹権現』、おばあさんは『犬飼明神』という神さまだったのです。

『富士山大縁起』(元禄10年)より

### (3) 富士山南麓の修験道

富士吉田を中心とする富士北麓は徐福伝説は豊富であるが、富士南麓には徐福伝説はない。富士北麓は、修験道の範疇には入るものの、関東地方の富士講と御師の活躍の場であるのに対し、富士南麓は、熊野系の村山修験の中心地であり、現在でも村山浅間神社の境内には修験道祭事で利用された護摩壇などを見ることができる。聖護院本山派に所属する法親王（皇族の僧侶）は江戸時代になってからもたびたび村山浅間神社に参拝しており、現在に至っても聖護院本山派との結びつきがあるなど、本格的な修験道の地であった。

本格的な修験道聖地は、富士南麓の他、羽黒、白山、彦山などがあるが、いずれも徐福伝説がない。

## 5. 各地の徐福伝承地と修験道

日本の徐福の伝承地をたずねてみると、いずれも神仙思想が感じられる地域だ。徐福伝説の出所を見ても、多くが修験道関係の寺院であることがわかる。それでは、日本各地の徐福伝承地と修験道の関係を見てみよう。

### ① 佐賀市金立山

佐賀は「平原広沢」の水田が広がり、弥生時代の吉野ヶ里遺跡あり、まさに徐福の渡来地にふさわしい場所ではあるが、伝説の中心は、山頂に巨石が群がる金立山であり、ここの金立神社は、自然崇拝時代の神社の形態を残し、神仙が感じられる場所である。

地元研究者によると、この地は修験道の活発な地域で、佐賀県内、福岡県八女市等の徐福伝説の根は同じだろうとのことだ。



### ② 鹿児島県いちき串木野市

徐福伝説のある冠嶽は、6世紀に熊野権現を勧請して寺院を創建したと伝えられ、この地方の修験道の中心地として栄え、近年、「冠嶽山鎮国寺」として再興した。当寺は、毎年徐福像の頭に花冠をかぶせる、「徐福花冠祭」を催行し、修験者姿の僧侶などが街を練り歩き、健康、安全を祈願する。



### ③ 宮崎県延岡市

延岡市にある「今山」は、かつて「蓬莱山」と呼ばれており、そこに立つ仏教寺院は「蓬莱山今山大師」であり、近くには「徐福岩」があった。また数キロ先には、修験道の聖地であった行藤（むかばき）山がある。



④ 京都府伊根町

ここには、徐福を祀る「新井崎神社」があり、ここからは、海の中に「杓島」と「冠島」という二つの島が見える。神仙思想では、修行を終えて、杓と冠を残して肉体を消滅させ、仙人となることもあるという。また、この近くには、不老不死伝説の浦島太郎を祀る神社もあり、神仙を強く感じさせる地域である。



⑤ 神奈川県秦野市

大山への登山口である秦野市蓑毛の大日堂は宝蓮寺（大日堂を管理している寺）の縁起には、この仏像は、徐福がインドの仏像を持ってきたものである、とある。（歴史的にはありありえない話であるが）

大山は修験道の山岳信仰の山であり、大日堂には全国から300人を越える修行僧が集まったということだ。

⑧ 秋田県男鹿半島

江戸時代の紀行家「菅江真澄」は各地を旅して絵入りの紀行文を書いたが、男鹿地方の紀行文、絵には、修験道寺院の永禅寺の敷地に「徐福塚」が描かれている。永禅寺は、修験道の大きな寺院であったが、明治時代に破壊され、徐福塚も行方不明となったが、近年地元有志により再建された。



⑦ 青森県中泊町小泊

尾崎神社には、徐福像とされる秘仏が保管されているが、この神社は江戸時代には修験道の飛竜宮であり、背後の権現崎全体が修験道の聖地であった。



以上全国の徐福伝承地と修験道の関係を見て来たが、この他の徐福伝承地も修験道と関わりのある所は多い。

## 6. 熊野と各地の徐福伝説との関係

修験道の中心地が熊野であること。また、各地の徐福伝承地は、修験道の聖地であることを述べてきた。では誰がどのようにして徐福伝説を伝達したのだろうか？

「はじめに」で述べたように、2017年、修験道研究の第一人者である宮家準（みやけひとし）先生から、修験道のテキストには、徐福は登場しないこと、また、熊野三山の修験者



が全国に布教に出かけることはなく、徐福伝説を伝えたのは、地方の人たちが熊野詣でに来て徐福伝説を持ち帰ったのであろう、と教えていただいた。この前提で考えると、謎が多かった各地の徐福伝説の解明が容易となってくる。

新宮を中心とする熊野の徐福伝説は、速玉大社などの熊野三山にある文献からは確認できない。しかし中世の古地図に「徐福宮」あり、また紀州の殿様が建立した徐福の墓など、徐福伝説は修験道本体とは離れた修験道の地で増殖していったと考えられる。

誰がいつの時代に持ち帰ったかははっきりわからないが、地方の修験道系寺院の修験者、修験者の導きで熊野詣でを行った檀那と言われる地方の有力者、庶民化した江戸時代の里修験者、さらには村の鎮守を守る一般の庶民などが考えられる。

## 7. 徐福伝説の修験道以外の要素

修験道は徐福伝説の最も大きな要素であるが、これが全てではないことは冒頭に述べた。このほかの要素として、中国船の漂着地や渡来伝説地に徐福伝説が発生しやすいことが挙げられる。日本海側の港は、渤海国との交流等、大陸との関係が深い地域であり、これと徐福伝説が結びつきやすいと思われる。また、秦氏の渡来は歴史的には徐福の時代と異なり関係のない話ではあるが、秦氏と徐福を結びつける言説は現在でも根強い。

徐福伝説の多くは、「徐福が中国の先進文化を持ってきた」としている。江戸時代までは中国は日本文化の先生であったことから、中国を崇拝する気持ちが、徐福伝説を生じさせたと考えられている。しかし江戸時代後期から、国学が盛んとなり、国学の一派である平田篤胤は、徐福が中国から文化を持ち込んだ、というそれまでの伝説を否定し、徐福は単なる難民であり、徐福が日本の文化に貢献したことはなかった、としている。この考えは、日本は古来中国に負けない文化をもっていたはずだ、とする発想から来ており、平田篤胤は漢字伝来以前に日本にも独自の文字があったと主張している。明治に入ると国学が政府にも取り入れられて、「日本がアジアで一番」というジャパンファーストが日本の精神文化の中心となる。こうした中で、「徐福は実は日本人の子孫であった」、「徐福は中国人でなくユダヤ人だ」、などの新たな徐福言説が生まれてくる。このような時代と併に変化するという観点からの徐福伝説を研究することも必要と思われる。

また、『史記』の記事は、いつの時代でも有力な伝説発生源として機能していただろう。日本の伝説の多くは、古事記、日本書紀の記事をルーツにしているが、日本人に古くから読まれていた『史記』も伝説の発生源として大きい役割を果たしているのだろう。「はじめに」で記載したように、徐福伝説はこのようないくつかの要素が長い年月のあいだに反応しあってできたものであると考えられている。徐福伝説の解明は、単に徐福だけを見るのではなく、伝説をとりまく時代とともに変化する宗教、思想を見る必要がある。

なお、青森県小泊の徐福伝説等、一部の地方では、地元の徐福研究者により徐福伝説の研究がなされており、これらは徐福研究の重要な基礎資料となる。現在日本徐福協会各地の徐福伝説の状況を整理しているが、これを充実させることが必要だろう。

伊藤健二：神奈川県日中友好協会会員、神奈川徐福研究会理事、日本徐福協会事務局長  
連絡先 xufu@krd.biglobe.ne.jp

参考：富士山の徐福伝説（富士山徐福学会作成）



表1 富士山縁起一覧

番号	発行場所	制作年	作 品 名	発 行 元	神椿・千眼大天女	本 地
1	村 山	14世紀前半	富士山大縁起(東泉院)	富士愛鷹両山惣別当 権大僧都頼恵	—	大日覚王
2		1251年	浅間大菩薩縁起(残卷)	富士滝本往生寺	?	?
3		14世紀前半	富士縁起(断簡)	称名寺伝本、全海書写	?	大日覚王
4		—	頂上大日如来略縁起 (村山三坊)	村山郷富士山総別当三坊	○	大日如来= 天照大神
5		—	富士山縁起(村山)池西坊諱栄	大峰大先達浄蓮院兼帯 富士山別当池西坊諱栄	○	大日覚王
6		1713年	富士山縁起(池西坊行存撰)	池西坊行存撰・ 書林中野六右衛門寿梓	—	大日如来
7		—	富士山畧縁記	富士山根本表南口五合目 佐野太郎兵衛	○	大日如来= 浅間大天女
8	大 宮	—	富士大縁起(大宮)富士氏	—	—	—
9		—	富士山本宮・富士本宮略縁起	富士本宮社司・別当宝幡 院・公文富士長門	—	大日如来
10		—	富士山縁起状 (林家伝来内閣文庫本)	—	—	大日覚王
11	駿 府	1638—45年	本朝神社考(富士浅間縁起)	—	—	—
12		1645年	神社考詳節(縁起)	—	—	—
13		1773年	浅間御本地御由来記	駿河国安倍郡志豆機山 浅間惣社	—	—
14	南 口	1692年	富士大縁起(茶畑)	駿州駿河郡小泉庄茶畑村	—	大日如来
15		1756年	無量寿禅寺草創記	—	—	—
16		—	駿河記・漢竹権現社伝	—	—	—
17		—	駿河記・富士縁起	—	—	—
18	吉 田	1756年	富士山略縁起(吉田)	—	—	—
19		—	富士山縁起(吉田)田邊家蔵	鷹屋・外川美濃	—	大日如来
20		—	富士山畧縁記	御師年行司・ 江戸小石川佐野越後	—	—
21	不 明	1362年頃	詞林采葉抄(富士縁起)	—	—	—
22		14世紀後半	神道集・富士浅間大菩薩事	—	—	—
23		1678年	富士山の本地	本石町三丁目 駿河屋徳兵衛開板	—	大日如来



浅間大菩薩呼称	浅間大菩薩の示現	霊場・山名案内	富士出現伝説	赫夜姫譚	新山由来	開山伝説・役行者	富士山異称
—	—	○	○	—	○	—	—
浅間大明神	?	?	○	?	○	○	?
浅間大明神	女・天女	?	?	○	?	?	?
—	千眼大天女	○	○	—	—	○	○
浅間大菩薩	千眼大天女赫夜姫	○	○	○	○	○	○
富士浅間大明神富士大権現	かくや姫	—	○	○	—	○	○
浅間大菩薩＝千眼大天女	赫夜姫＝富士千眼の大神	○	○	○	—	○	○
浅間大菩薩	赫夜姫	○	○	○	—	○	○
—	木華開耶姫命	—	○	—	—	○	○
富士浅間大菩薩	—	○	○	—	—	—	○
浅間大神	女	—	○	○	—	—	—
浅間大明神	賀久夜姫	—	—	○	—	—	—
浅間大菩薩	北の方此花さくや姫	—	—	—	—	—	—
浅間大菩薩	赫夜姫	○	○	○	—	○	○
浅間大士	赫夜仙妃	—	—	○	—	—	—
—	赫夜姫	—	—	○	—	—	—
浅間大明神	女	—	—	○	—	—	—
天上の皇	赫夜姫	—	—	○	—	○	—
太神・浅間大薩	赫夜姫	○	○	○	○	○	○
—	木花開耶姫尊	—	○	—	—	—	—
—	—	—	○	○	—	—	—
富士浅間大菩薩	赫野姫	—	—	○	—	—	—
あさまのごんげん	か、やくひめ	○	—	○	○	○	—